

論文の要約

『創造の技術 ルネサンス模倣論とミルトン』

上利政彦

(あがり まさひこ)

論文の要約

初めに、プラトンのイデア論に基づくキケロの模倣論に触れる。精神animus/mindを鉤と考えるプラトン・キケロ主義が英国16-17世紀、アスカムから始まりドライデンにおいて集大成される軌跡をたどる。次いでミルトン作『失樂園』（1667）が如何にヴァージル作『アエネイス』を模倣してキリスト教叙事詩の新しい実践を試みたかを考察する。最後に17世紀、宗教と新科学が文芸模倣論と共通する真実を求めたことを検討する。

従来、英国ルネサンス期における剽窃と模倣の問題は、否定的な視点が、テキスト創造という文芸論的視点をややないがしろにしてきたと思われる。小論は、キケロの創造的模倣論がこの時期に絶えることなく連続する事実を辿る。